
パワプロクンポケット0！

ブラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パワプロクンポケット0！

【Nコード】

N3293Z

【作者名】

ブラッド

【あらすじ】

気がついたら神に転生させらる（中略）パワプロクンポケットの世界にいた青年。死亡フラグが盛りだくさんのところに行きたくない」と反論しようとしたが、その前にパワポケの世界に送られてしまう。なにかと納得できなかった青年だが、諦めは早いのですぐに自分の状況下を受け入れた。

……とまあ、そんなマイペースな青年が不老だとか干渉受けないだとかそれっぽい能力を授かってパワポケの世界で生き延びるお話です

注意！作者の野球知識と文才はゴミ以下です！

時空列、歴史がおかしかったりするのはSSですのでツツコミはしないでください……そういう設定が嫌いだ！見たくもない！という方は回れ右を推奨します。

ブログっぽいもの（前書き）

D・C？、マジこいの両方のネタが思い浮かばなかったので書いてみました。

メインはこの二つの小説なので、こっちの更新は稀にという形です。それでも大丈夫！という方はお進みください……

ブローグっぽいもの

???「いつつ………にやろー、神だったらもつと丁寧な事を運べないのかよ。……でもってここどこだ？」

どうもこんにちは。俺は今大変な目にあってしまったただの一般人です。

新作のパワプロクンポケット14を買おうと出かけたのはいいものの……気がついたら車に撥ねられていたみたいでした。

そしてテンプレのように無機質な空間に移動させられ、一人ポツンと立っていた老人は案の定神と名乗った。

その神は俺がなんでこんなところにいるのか困惑していたら、口を開いて

神「パワポケの世界に行つて転生してこい。チートっぽいなにかやるから。」

なんと理解しがたいことを言ったと思ったら、俺が死ぬ前の出来事を走馬灯のごとく思い出して、脳がその勢いについていけなかったのか嘔吐した。

少しして気分が収まった頃に、あんな死亡フラグ満載の世界に行くなんざ、ご免だったので抗議しようとしたら

神「もう大丈夫のようだな。ほれ、行つてきんしゃい」

足元に黒い空間が開いて、頭からまっさかさまに落ちた。

なんてせつかちな神だろうと文句のひとつでも言おうとしたのに、
できませんでした。

で、黒い空間から抜け出せたと思ったら、今度は空を飛んでました。
……いや、あれは飛んずるというよりは落っこちてたな。あまりの
風圧に耐え切れず気を失って、いつか神に復習でもしようと思っ
て意識を手放した。
そして今に至る。

……色々と納得できないところはあるけど、まあいいか……諦めも肝
心だよなうん。

頭のところがズキズキするのは多分地上落ちた時にぶつけたんだろう
が………良く生きてるな俺。

神が簡単に死んだらつまらんだろうから、向こうでも生き残れるよ
うに力を授けるって言うてたな……まあ、これは後で確認するとし
よう。

頭をさすり立ち上がって360度周りに目をやる。

このでこぼこした地形に広い空間土地からして……

主「採石場か？」

採掘場と言ったら………パワポケ3の時代なのか？

だが、こういう荒れた場所は他にもいくらかでもあるはず。年代もも
っと進んでもかもしれんし、まだ3の原作に入ってるとは限らない。
しかもパワポケはシリーズによって時期が被ってる作品があった。

俺は全シリーズを前世でプレイしたことあるとはいえ……ストーリー
やらキャラを鮮明に思い出すことはきつい。最後にやったのいつだ
っけなあ……1と2なんて重要人物くらいしか思い出せんぞ。

原作介入する気はないが（死にたくないし）なんらかの出来事で巻
き込まれる可能性もなくはない。

……とりあえず今後のためにも（生き延びるために）神がくれたと思われる力の確認を試みよう。

でもどうやって確認すりゃいいんだろ？うーむ……手を翳してかめ。めはでも打ってみるか？

……それで放つことができたなら色々と厄介ごとになりそうだ。

えーっと、前世で読んだSSとかを参考にしてみようかな。

こういう時は目を瞑って感覚を研ぎ澄ませれば、頭に思い浮かぶ……

……はず。

その場でしゃがんで、足を組んで手も印っぱいなにかを組んで、瞑想みたく実行してみる。

主「……………おっ」

すると、頭の中になにかが流れ込んできた。

ふむふむ……これが俺の……能力か？

『干渉を遮断する程度の能力』

『不老』

『人外の強さ』

主「……………」

……なんだこれ？

最後のはともかく、最初能力と不老はなんだ。

どこの鬼巫女だよ……そんなもってパワポケの世界で不老ですか……。

この二つは後回しでいいや。人外の強さってのは……俺がここに送られて頭から落下して、生きてることが強さの証明になる……か？

……まあ、考えるのはいつだっていいか。

不老ってことは老衰では死なないんだろっし、しばらくは自由気ままにやらせてもらおうとしよう。

主「まずはこの世界の見聞を広めるべく情報収集……旅にできよう」

こうして俺の終わりなき？旅が始まった……

この後周辺を調べてわかったことだが、極悪高校はまだ廃校とはなっていないかった。

まだパワポケのストーリーが始まって最初のところのことかねえ……

ブローグっぽいもの（後書き）

主人公の名前は次話で明かします。

それにしても勢いで書いた文章であって酷いなあ……もつとがんばろう。

俺とテニスとスター選手（偽）（前書き）

野球の描写はまだありません。

パワポケだからいいよね？うん、いいはず……

俺とテニスとスター選手（偽）

主「クール……ドライブ！」

あれから10年近く月日が流れました……

原作には特に介入してない。ただ自分の力をこの10年かけて把握しながら、日本中を見て回った。

まず『干渉を遮断する程度の能力』は自分の意思で物事のなにかを決め、影響を受けないというもの。

ちなみに俺は常時この力を発動して「自分の体に害をなすもの全ての干渉」を遮断している。

このお陰で銃弾は俺に当たる寸前のところで消失し、一口食べただけで致命傷になる毒も俺の前ではただの食べ物と化し、俺の生活面は護衛いらずの安全が確保されてる。

……最初の頃は大変だったな！。

力の制御が出来ずに「自身に近いもの全ての干渉」を遮断しちまつたせいで、空気は吸えんわ、近くの生き物は消滅するわ（人間じゃないよ？）手で触れた建物も蒸発しちまつたし……。

まあ、今はそんなこともなく他の人が俺に触れることだって問題なくできるし、致命傷にならない物体が俺に飛んできても不自然に消えたりはしなくなった。

制御できれば色々と応用できるしなこれ。

でもって不老もこれまた便利で、自分の容姿……肉体年齢を上下に操作できる。

つまり、自由に大人になれたり、子供になれたり、学生に変化することが可能だ。

ちなみに俺は17歳のところで止めてある。ここに送られたのが前世と同じ年齢だったし、今は無闇に年齢詐称する必要ないしな。

『人外の強さ』これに関してはそのまま。語ることなんてほとんどない。

実体験を語るなら……不良30人を片手でいなせます（笑）
こんだけで十分っしょ。

でもって今はバイトで貯めた金（身分証明書？偽造ですがなにか？w）で買ったラケットを装備し、地域の公園で知らない人たちと試合をしています。

ストリートテニスってやつだ。

……うん？野球しろって？あゝ……………気が向いたらねww

モブA「うおっ、なんだ今のスマッシュは？！バウンドしなかったぞ！」

モブB「すげーよあいつ……………これで15人抜きだぜ」

モブC「他の試合したやつらは疲れて倒れてやがるってのに……………あいつは息のひとつさえ乱れてないぞ……………」

なにやら外野が喚いてるな。

一通り試合をできたので、そろそろここを立ち去るとすっかな。うん、満足したし。

クールドライブ打てたしwww

にラケットを担ぎこの公園から出ようと――

少年S「なあなあ、昨日のパワフルスポーツ見たか？」

少年D「見た見た。小杉選手16試合連続ノーヒットだろ。最近スランプみたいだな」

少年S「そうそう、それにこの間の試合が終わってから、ファンと喧嘩して殴ったみたいだつてさ」

少年D「うつそマジ？それってやばいんじゃないの？」

少年S「それとは違って大神モグラーズの選手いるじゃん？あの選手がそれまた――」

公園の入り口のところでなにやら野球談義をしている少年二人の会話に耳を傾ける。

俺がぼけーっとしてる間に原作は5まで進んで行ってるみたいだな。たしか過去に一度プロペラ団と名乗るやつが俺のことをプロにならないかと勧誘してきたことがあったなあ……気まぐれで草野球の試合の助っ人に参加しちまったのがいけなかったつけ。

その団員が余りにもならないか？ならないか？とキモイぐらいにしつつあったから、バツクドロップをコンクリの上で決めてやったぜ
www

主「ふーむ……小杉かあ」

パワポケ5はシリーズの中でもかなり好きな作品だった。そんなでもってその作中に出てくる小杉は男キャラでも結構好きだったんだよなー。

あ、性格は入れ替わった方だけだね。

小杉優作

入団一年目で新人王に輝き、ルーキーのスター選手。

2年目の春に大神モグラーズになる前のドリルモグラーズ所属の万年2軍球団のお荷物のパワプロクン（5主）とお互い走った勢いを殺さず、衝突してしまいお互いの精神が入れ替わる。

その後は5主（小杉優作本人）として、どうにか元の体を取り戻そうとしパワプロクンの体で生きていく。

クビ寸前の状態から、不幸に負けじと努力し三年目には小杉（5主）と同じ舞台にまで上り詰め、日本シリーズで頂上決戦をする。

その後は5主として歴史に残る活躍をしたんだろうが、そこんこは公式でも公開されてない。

で、入れ替わった方の小杉優作。

こっちはかなり曖昧なんだっけ正史が……

ゲーム内では3年目の試合で勝ち続けるとグッドエンドを迎え、5主（小杉）と和解して生涯のライバルとして活躍する……といったものだった。

逆に優勝できず、日本シリーズに参加できないとBADVで小杉（5主）はそのまま墮落していき、成績も下降。

入れ替わる前の友人、塚本……だっけ？（影薄いやつの名前なんぞ覚えてられんw）裏切られてしあわせ島という場所に島流しされ売られそこで強制労働をさせられる。

ちなみにこっちの方が正史だったはず（正史はどれも曖昧なのが
いから断言はできない。モグラーズが日本一になっても正史では小
杉がしあわせ島に送られているからだ）、パワポケ5の次回作、パ
ワポケ6での裏サクセスでチームメイトとして小杉（5主）が登場
してるからだ。

その後は表サクセスで登場しないが、おまけサクセス。野球にまっ
たく関係ないストーリー裏サクセスでちょこちょこ登場する。

たしか小杉は5、6裏、9裏、14裏で仲間キャラとして出てくる。
裏では結構活躍するのに、本編だとあれだからあ……あれ？6裏つ
て一応本編の続編だっけか……

まあ、そんなことはいいんだ。俺が言いたいのは小杉優作（入れ替
わり）は個人的に好きなキャラなので、BADENDになつてほし
くないですよ。

原作崩壊するだろうが、でもそんなのかんけいねえ！（ネタ古いつ
て言わんでwww）

今まではただのんびりと過ごしてきたが、いい加減退屈してきたん
ですよ！もう暇で暇で……宛てのない旅　がここまで退屈だとは思
わなかったんだよ……男のロマンだと思つてたのになあ。

それに一人旅なわけで人肌が恋しくなつたんですよ……あ、念のた
めに言つておくけど俺は鬼鮫、阿部さん、兄貴のような性癖の持ち
主じゃないからな！

普通に女の子が好きなノーマルな嗜好の人だ！

よし、善は急げだ！今から小杉（5主）のところに突撃だ—————
—————！！！！

主「にんにん！」

しゅばっ！

『消えた！？』

ふひひwww人外な体でサーセンwww
www

Side 小杉優作（5主）

「……くそっ、どいつもこいつもバカにしゃがって！」

道路に転がっていた空き缶を思いっきり蹴っ飛ばす。

だが、こんなんでは俺の怒りは収まらない。

せっかくあの小杉から体をもらったってのに俺の成績は下降するばかり。それどころか、俺の調子が悪いことに勝手に期待してたファ

ンの野郎は野次を飛ばしてきやがる始末。

今までの結果が出せないこともあったので、ストレスがピークに達した俺は怒りに任せてそのファンを殴ってしまい喧嘩に発展してしまった。

球団からはしばらく自宅謹慎の処分と減俸が言い渡された。

「ちっ、このままじゃ昔の俺に戻るのか……？」

蹴り上げた缶のどこまで歩き、拉げた缶を拾い握りつぶす。

冗談じゃない……もうあのなにもかもに絶望した時の俺には戻りたくない！

それにあいつ、この小杉優作の体持ち主だったやつ。俺の体でどんな上により詰めてやがる。

……万年二軍で解雇寸前の俺の体でだ！

ふざけんな！！俺がどんなに練習しても一軍には上がれなかったんだぞ？！それが俺に対してのどれだけの屈辱かわかるか……！！

俺にだって入団初めの時は練習にもまじめに取り組んでいたんだ。けれどいつまで経っても二軍のまま、他の同期、後輩は俺を置いて一軍に上がっていく。

毎年そんなことが続いたから俺は野球への情熱を失い、酒と賭け事に溺れていった……

仲間には見捨てられ、野球には裏切られ、偶然この新人スター選手の体を手に入れたのにまた落ちぶれるだと……？

「もう負け犬にはならねえ……なりたくない！そのためだったらどんな困難にも乗り越えてみせる！」

「その言葉に偽りはないですか？」

な……

「誰だ!？」

後ろから声がしたので、後ろを振り向いてみるがそこには誰もいない。

空耳か？だがしっかりとこの耳に届いたんだが……

「気のせいか。……疲れてるのか俺」

「ええ。そのとおりです」

「!？」

今度は俺が進路方向に歩いてた方からさっきと声が。

勢い良く振り向くとそこには銀髪の長い髪を下ろし、見ていると全てを自分の世界に引き込むような蒼い目をした和服を着こなした女が薄ら笑いをして立っていた……

side } 小杉優作 (5主) } out

あれが小杉優作か！。遠巻きに見ても機嫌が悪いつてことがわかるな。

あ、缶蹴っ飛ばした。

もうちょっと様子を見てから小杉と話して見るとするかな。

「ちっ、このままじゃ昔の俺に戻るのか……？」

舌打ちをしてさっき蹴っ飛ばした缶を拾って思いっきり握り潰していた。

小杉にはれないように、『気配』と『姿』の干渉を断ち切り、今の俺は完全に空気と化してる。

たとえ相手がどんなに敏感で勘が鋭い人でも俺を視ることはできないが、雰囲気を出すために電信柱の影に隠れて小杉の様子を窺っています。

こういう探偵っぽいことってガキの頃に一度あこがれてたんだよねー。まさかするとは思ってなかったけどさ。

「もう負け犬にはならねえ……なりたくない！そのためだったらどんな困難にも乗り越えてみせる！」

ほむほむ……紛いにもプライドはあるみたいだな。

でも口先だけじゃ結果はでないしねー。そろそろ話しかけてみるとするかな。

「その言葉に偽りはないですか？」

小杉の背後に立ち声質を女性に変えて、問います。

「誰だ！？」

びくつと一瞬身体を竦めてから、こつちを振り向く。

男の癖になにびびってやがると思ったが、時刻は日付が変わる頃。そんなもって道は狭いし人通りも少ないところにいきなり後ろから声が聞こえたら誰だってびびるか。

「気のせいかな？……疲れてるのか俺」

あ……そういや俺今見えないんだっけ。

このまま元に戻ってもいいんだけど、能力の説明とかしなきゃならんかもしれない……もう一度小杉の背後に移動してから干渉を復元するでしょう。

「ええ。そのとおりです」

「！？」

首が吹き飛びそうな勢いで体と共に反転する小杉。

「だ……誰だお前は！」

「さあ、誰でしょうね。知りたかったらまず自分から名乗るのが礼儀じゃありませんか？」

「……………俺はこゝ」と言っても貴方のことは存じているのですが。小杉優作選手ですよ。今年で3年目2なるプロ野球選手」……………」

あつはつは。まあ、そう睨みなさんなつて。

ちよつとしたお茶目じゃなか。お前さんのそのイライラを和らげて上げようとしたからかい半分のお茶目だったのに。

まあ、逆効果みたいだったけどw

「……………お前は？」

「そうですねー。一方的にこっちが貴方のことを知っていただけで
すから、名乗る必要はないのですが特別に苗字を教えて差し上げま
しょう」

「……………」

おやおや？肩がぶるぶると震えてるな。

俺のことをぶん殴りたいのかもしれないけど、ついこの間ファンと
殴りあったこともあってか、理性で抑えてるようだ。

それに初対面だったら俺は男じゃなくて、まず女に見えるからだろ
うな。前世ではありえない銀色の髪は肩までかかるくらいに下ろし
てるし、紫色の紫陽花の絵柄が書いてある女性用の着物を着てるし、
言葉遣いも柔らかくしてあるし。一人称は俺から私にしてるからね
！。

なぜかって？そっちのほうが相手の反応が面白そうじゃんwww男
だって知った時の反応がwww

「仁王です。どうぞよろしく」

俺にできる精一杯の笑顔を浮かべて手を差し出す。

ついでに言うと俺の本名は 仁王雅《におう みやび》。雅って
女性っぽい名前だよねー

前世ではそれが原因で女らしくない男とか言われてからかわれてた
っけなー。前世の容姿は誰が見ても男だったので当たり前なんだけ
どさ。

「っ！ふ、ふん！よろしくしてやってもいいぜ／＼」

……おやおや、意外と初心なんだな。

こっちが差し出した手を取らずに赤くなつた顔を誤魔化すようにそっぽを向く。

これは俺が男だと知ったらどういうリアクションをするか楽しみだな。♪。

ま、おふぎはこのくらいにして本題に入らせてもらつとしますかね。

「それですな小杉さん。私がここに着たのは貴方に用があるのですよ」

「ふん……俺にはないぜ。それに俺は疲れてるんださつさとその用とやらを済ませてくれ」

なんか矛盾してない？用がないのに俺の用に付き合ってくれるのかよ。

意外と人付き合いはそう悪くないのか？こっちとしては好都合なんだからいいんだが。

「では単刀直入に申し上げます。小杉さん————いえ、五十嵐いがらし猛けろ 貴方はもつと野球がうまくなりたいですか？」

「！？」

はてさて……どうなることやら……

俺とテニスとスター選手（偽）（後書き）

パワポケ5はパワポケシリーズの中でも屈指の面白さ！

一応作者はなんとか買い集めて、全シリーズをプレイしましたw

現在はパワポケ5の話にちよつとだけ介入しますが、その後のことはまだ未定ですかね！。

9と13、14には介入させたいつもりですが……そこまで続くかなあこの作品……

ちなみに五十嵐猛とは5の主の名前です。

パワプロ君とかでもよかったのですが、これ以降もパワプロくんは登場するのでこんな名前にしてみましたw

キャラプロフィール（前書き）

話が進んで行く毎に更新するです。

ぶっちゃけ最初なのでスルーでいいものww

キャラプロフィール

仁王 雅 《におう みやび》

年齢17歳（肉体年齢）だが前世を含めれば歳は30越してる。

この小説の主人公。銀色の髪に蒼い目をした中性的な顔立ちは10人中9人が女だと断言する。

プライベートの時は髪は縛って後ろに纏めていて、私服も男用のを着ている。

その時は男の比が7女が3である。

野球に関しては前世では遊び程度で、パワポケの世界からは旅の途中でたまに試合観戦をしたり、バッティングセンターで打つなどその程度である。だが身体能力が異常に高いために、センスと才能も持ち合わせてる。

本編で野球するのは未だ未定。

能力所持者であって『干渉を遮断する程度の能力』という能力を持ち、常時自分に悪影響を及ぼすものの干渉を遮断してる。つまり、見えないバリアーを自分の周囲に張ってるみたいなもの。

それでいて不老で、これもまた自由に自分の肉体年齢を操作でき、子供から老人まで変化することができる。

前世ではパワポケシリーズを一通り全部プレイしてるが、知識は中途半端。

今後原作にどの変化をもたらすかは誰にもわからない（作者以外） W

野球能力

選手登録名

仁王 両打ち 左投

ミート A

パワー ????

走力 ???

肩力 ???

守備 ???

弾道 ???

エラー回避 ???

特殊能力

アベレージヒッター（略称AH）

威圧感

その他etc……

球速 ???

コントロール ???

スタミナ ???

変化球 ???

ポジション 不明

キャラプロフィール（後書き）

毎日更新目当てに投稿。

まあ、どうせ途切れますがw

野球しろ——あ、してますね……（前書き）

昨日投稿しようと思ったのに寝てしまったというオチ。
毎日投稿が初っ端から散りましたwww

小杉魔改造フラグ。サブタイは思いつき。

パワポケ5の人物は小杉とその他メインキャラ数名しかでないと思います。

5の表サクセスは何気に強い選手が育成しやすい。

3もかなり強い選手はできるのですが（金の力でw）サクセスクリアが異常にむずい上に一年目からGAMEOVERになりやすい……

ショートして警察官にポイ捨てされるのは良くあることwww

野球しろ——あ、してますね……

「ふんふんふーん」

金属バットを片手に持って、くるとバトンを回すかのように手元で弄ぶ。

バッティングセンターで着物を着た女（俺は男だが）がベンチに座って軽々と片手でバットを弄くってる様はさぞ目を疑う光景だろう。

んゝ休日はやつぱそれなりに人がいるな！。

この中にプロを目指して練習してる人は何人いるのかなゝ？

少年だったら夢の一つや二つはもってそうだから、希望と熱意を持ってバッティングに励んでそうだな。

青春だねえー……がんばれよ野球少年たち！

「……なに遠い目をしてやがんだ？」

ノホホンと他の人が爽快にボールを飛ばしてるところを觀賞してたら、俺の目当ての人物から声がした。

「お、ちゃんと来てくれたんだな。だけど、女を待たすのは良くないぜ？」

「てめえは男だろうが……！」

俺の性別はもう小杉には伝えてあるので、怒声入りの突っ込みが飛んできた。

その小杉の大声にその他外野は「ええー……！？」と驚愕の交えた叫び声がしたがスル！。

どうでもいいが、小杉は一応スター選手なのでファンにばれない様
ちよつとした変装をしてる。

気取ってサングラスなんかかけてるが、すごく似合わないw

「小杉も着たとこだし、ちゃっちゃんと打つとするか。俺の実力が知
りたいんだろ？」

「気安く俺の名前を——んなことはどうでもいい。指導者が育
成者よりも下手だったら話にならねーだろうが。プロの俺がお前み
たいな不審者に劣るとは思わないけどな」

「不審者とは心外だな、俺はただの旅人だつてのに。ま、その威勢
が結果を知る頃まで保つてるといいんだがな」

そう互いにけん制しあつて俺たちはプロレベルコース……最高球速
150キロのところに向かう。

「俺から打たせてもらうぞ。勝負のルールは20球の内どれだけ多
くヒットが打てたやつが勝利でいいな？」

「いや、それじゃ長打の判定が曖昧だからポイント制にしよう。ヒ
ットが4点。二塁打、三塁打コースが5点。ホームランが7点で……
ボール球は1点というのでどうだ？」

「たしかにそれならパワーの比較とかもできるが……そこんこの
判断はどうすんだ？」

「安心しろ。俺がちゃんと公平にジャッジしてやる。ストライク判
定は待機してる方がやるってことで」

「へっ、上等だ。格の違いをみしてやるよ!」

ジャケットを俺に投げて、持参してきたバットケースから金属バットを取り出して、左打席のゲージに立つ小杉。
お手並み拝見させてもらうぜ……

数日前――

「……なにを言ってるんだ？俺は小杉だ」

「無理に隠そうとしないでいいですよ。貴方と五十嵐選手――
いえ、小杉優作の調査は済んでいます。貴方たちが入れ替わったことは把握していますよ」

「…………俺をどうするつもりだ。マスコミにでもタレこむ気か？」

「あははっ。そう身構えないでくださいよ。そんな双方にメリットがないことをしてどうするんですか？私はただ単純に貴方に興味があるんですよ」

マスコミに情報を与えたらそれなりの金を手に入れられるかもだろうが、俺は金に執着心があるわけじゃないし、そもそもマスコミなんぞに相手をするくらいなら、野球の練習してるほうがマシだねww

「興味だと？」

「興味というか好奇心？まあ、そんなのはどっちでもいいです。要は私は貴方がこのまま落ちぶれる前になんとかしようとしにきたんですよ。お節介かもしれませんが…………このままだと貴方は一生負け組みですよ？」

「！てめえっ！！」

負け犬という言葉に過剰に反応したのか、小杉が勢いよく俺の胸倉を掴み上げる。

「お前に…………俺のなにがわかる！何年も二軍のままくすぶって！球団のお荷物として馬鹿にされてきた…………俺のことが！！だが俺はこの体を手に入れた。スター選手として囃し立てられるこの小杉優作の体を！」

「さあね。俺はお前じゃないし自分のことは自分しかわからんだろ。大体、その体はお前が努力して手に入れたもんじゃなくて、偶然手に入れた産物だろ？他人の体で成績が下降するのは当然だろうが」

「ぐっ！」

言葉遣いを素に変えて、掴み上げられた手を捻り上げて背後に回りこんで、地面にねじ伏せさせる。

「やれやれ、選手が暴力振るっちゃダメだろうに。そんで？お前は
どうしたいんだ？」

「なに……」

ねじ伏せたまま、小杉に問う。

余り力を入れすぎちゃこいつが素直に答えるとは思わんで、手の力を緩める。

「簡単なことだ。お前はそのまま練習をせずにどんどん落ちぶれていくのか？元の体……五十嵐がどんどん上に上り詰めていつてるつてのに」

「……………るさい」

「きつとあいつは負けず嫌いなんだろうよ。スターの立場から一氣に落ちこぼれ選手になっちまったんだからな。だが、そんな状況下でもやつは絶望しないで、努力して、小杉優作がいたスターの舞台まで上がりつつある」

「……………うるさい」

「あゝあ。もったいないねー。お前さんも諦めずにチームメイトたちと練習してりゃ一軍にだって時間はかかっても上がったのだろう

に……」

「うるさい！」

力を緩めていたせいか、小杉は力任せに腕を振るって俺の拘束から抜け出し、俺を見下ろして今まで溜まっていたものを吐き出すかのようにまくし立てる。

「そんなこと！見ず知らずのお前なんか言われなくたってわかってるよ！！このままじゃいけない……俺はまたあの馬鹿にされてた頃にもどっちまうって！！」

「はっ……口でだったらなんとも言える。行動で示せや、行動で」

「わかってる！わかってるよ！！。………だけど、練習してもまったく成果がなくて……練習しても無駄じゃねーかって……」

はあ……こりや入れ替わる前の負け犬根性が染み付いてるみたいだな。

一度こいつに渴を入れてやるか……。

「俺はどうすればいいんだ……」

そのまま地に膝を付き頂垂れる小杉。
俺はポンと肩に手を置き。

「ええい！男の癖にうじうじしてんじゃねえ！！！！！」

反対の手で思いっきり頬をぶんなぐってやりました

「ほぶあ！！！！！」

ずざざざざつと地面を擦りながら、3mほど吹きとぶ小杉。

そのまま小杉が起き上がる前に俺は瞬動で小杉のマウントポジションを取りおうふくびんたをかましてやる。

「そんなんだからてめえは負け犬だとかうじ虫だとかドリームウ。コマンだとか言われるんだよ！！諦めんなよ！もつと！暑くなれよお！！！！！」

「ちょ、ちよつとま、はぶっ！」

ビンタビンタビンタビンタビンタ……こんなでいいかな。これで小杉も冷静になっただろ――

「……………」

「あ、あれ？」

気絶していた。

ビンタのしすぎで顔は真っ赤かにパンパンに腫れていて、白目を剥いていた。

おふ……やりすぎちまったwww

「起きろー朝だぞー」

小杉の体に『痛みと腫れ痕』の干渉を切断し、回復させる。
俺の能力は自分以外にも影響を及ぼすことができるんだ。

「う……………お、お前は！」

ずざざつと後ろに後ずさりする。

むっ……なんかむかつく反応だな。

「そう警戒しなさんなって。…………ちよつと叩きすぎただけじゃないか」

「あれでちよつとかよ！？三途の川が見えたんだぞ！！」

「生き返ったみたいだしいいじゃん別に。細かいことは気にするな」

「俺をあの世に逝かせようとしたことを認めてんじゃねえか!! 危うく人を殺しかけたってのに細かいことで済ますな!」

「まあ、それは置いといてだな」

「置いていくなよ!! 話合おうぜ! 命の大切さについてよお!」

意外とこいつツツコミ上手だな。俺の相棒に欲しいくらいだぜ。ま、俺は不老だからそんなことはできねーが……

「俺がお前さんを鍛えてやるよ」

「……は?」

「いや、だからお前さんを一流のプレイヤーにするために期間付きでお前の専属コーチになって、いじめ——指導してやる。感謝しなさい」

「なんで上から目線!!! 面白半分でやるつもりだろお前! 言い直したようだが俺の耳にはしっかりと苛めるって聞こえたわ!!!」

「面白半分じゃないって。ただの退屈しのぎなだけだから」

「なお悪いわ——————!!!!!!」

そして現在

んで、俺が適当に上手く言い包めて俺が無料でコーチしてやるよと言ったら「だったら実力を見せてみる！」と指を突きつけて言い放ってきたというわけだ。

完全に負けフラグが立ったのに気づかないで……

「どうだっ！ヒット4本、長打コースが2本でホームランが1本だ！……合計33点、恐れ入ったか！」

「……………ん？終わったのか。で、何点だった？」

「聞いてないのかよ！今言っただろ！かたろうが！……33点だよ！ヒ

ツト4、長打2、ホームラン1本の合計33!!」

「ふーん33か……打率に直すと2割5分くらいか。ボール球の個数は？」

「へっ！お前が俺に負けるのを恐れてわざとストライクにコールしかなないだろうから全部打ったぜ！」

「……………」

んなことするかよ。ボール球に手を出してアウトになるくらいなら見逃せと。

「バット借りる」

小杉のジャケットを渡して、代わりにバットを手からパツと持ち去って右打席用のゲージに入る。

「おい、お前自分のバットは？でもって着替えはないのか？……………まさかその格好でやるんじゃないだろな」

「ない。着替えがあつたとしても着るのめんどい」

ネット後方にいる小杉に目を向けずに、ヘルメットを被り硬貨を入れて球種、コースを選択する。
もちろんランダムを押す。

……確認し忘れたが小杉はちゃんとランダムにしたのだろうか……
まあいいか。

「ん」

特に動作もせずに、バットを構える。
初級は球の速さとか確認したいし様子見。

ビシュッ！

空気を切り裂くような音と共にピッチングマシンからボールが放たれる。

俺はバットを動かさずにただ見逃す。

「ストライク！どうした？あまりの速さにびびったのか？」

そんな俺の考えに気づくわけもなく、小杉^{バカ}から野次が来る。

その他外野も「あんな格好で、女性が打てるわけないよ……」とかぬかしてるが、気にしない。

「なるほど……たしかに速いな」

見た感じ153くらいは出てた。んでもって低めギリギリのところに決まった。

こりゃ普通の人はず打てないだろうが……

「俺は普通じゃないんだよね。残念ながら」

ボソッと自分にだけ聞こえる音量で呟き、ヘルメを深く被る。

ビシュッ！！

さっきよりも球速が増したボールが勢いよく迫ってくる！
俺はそれをバットを長く持ち直して冷静にコースを判断してから

キン！

バットを振りぬいた。金属特有の打撃音がゲージに響き渡る。

ボールが軟式だから、硬式よりも音が鈍いなー。やっぱり高校野球みたいなのが青春っぽい音がすきだな俺はw

うん、今は二遊間を抜けた単打だな。ちゃんとバットの芯で打ち返したし、タイミングもバツチリ。文句ないだろう。

「なっ……二球だけで捉えただー!？」

小杉さん驚いてますねwwwまあ、こんな分厚くて袖も長い動きづらい服で打ったら驚きもするか。
でもまだ俺のターンは終了してないぜ。

ピシュッ!

3球目が放たれる。今度は球速が下がっているがボールの軌道が放物線のような感覚なので、下系の変化球だとは思っただが……あ、ボールの回転が極端に少ない。

「フォークか?ほいつ」

どのくらいの変化するかわからないので、持ち前の動体視力と身体能力で変化に応じて右方向に流し打った。

外野からは「おー！」と歓声が、小杉はネットの網目を掴んで歯軋りをしていた。
あ、ジャケット落ちてる。

「この調子でいくぜ」

「ラストッ！」

キイイインッ！

フルスイングで真芯に捉われたボールは凄い勢いで上に飛んでいき、

ドゴォッ！！！！

前方にあったホームランターゲットにぶち当たった。

これは文句なしのホームランだな。小杉はこれに当たってなかったみたいだし。

「こんなもんか」

微妙に腕鈍ってるな。最後に野球したの2年前の草野球チームの練習試合の時だっけなあ……

前世では中学から野球をしていたけど、それほどの実力はなかったしな。

中の下つてとこだったな。それでも楽しかったことは覚えている。

あの頃のこととはもう鮮明に思い出せないんだよね。……思い出そうとすると頭に靄がかかってチームメイトの顔すら浮かべられない……歳かなー俺もw

「……おい」

ゲージから出ると、前髪で目が隠れて表情が見えないままで小杉が感情を押し殺したような声で俺を呼んだ。
むむ？どうしちゃったんですかね？

「お、これでわかってくれたか？俺の成績はヒットが15本、ホームランが1の67点。実際のマウンドで打ったら微妙に変化するかもだけとお前よ」「俺を鍛えてくれ！」「おお？」

ニコニコして話す俺に小杉はなんも反応しなかったが、突然人目を憚らず、小杉はガバツと座り頭を地面に頭突きする勢いで下げた。
今の小杉の体勢はジャパニーズ名物？のDOGEZAをしてい

る。

「打ってる時のお前を見てわかった。今の俺はただ人の体を借りただけの天狗だったんだ。もう一度基礎から鍛えなおして……あいつに勝ってやるんだ！」

闘争心が付いたようだ。入れ替わってからの小杉の成績を昨日のうちに調べてみたが、日が続つにつれ生成期が下降していた。大方真面目に練習せずに、スターという地位を利用して遊び呆けていたんだろうな。

「ふむ……言い忘れていたが俺の指導は厳しいぞ？途中で逃げ出すのはナシだからな。お前は続けられる覚悟があるか？」

「上等だ！男に二言はねえ！！」

「ふふふ……そうこないとな。はいこれ」

屈んでメモ用紙を差し出す。

小杉はそれを受け取り座ったまま用紙を確認する。

「なんだ……地図？」

「そそ、そこに書いてある場所に来い。明日からお前を一から鍛えてやる」

立ち上がって小杉に背を向け歩き出す。

「あ、そだ……野球道具は持ってこなくていいぞ。必要なものはこちらで用意するから。ま、今日一日はゆっくり明日に備えて休んで

おきな」

片手を上げて俺はバッティングセンターを後にした。
さて、俺も準備しないと。
俺は超厳しいぜ……小杉

その時の俺はさぞ黒い笑みを浮かべていただろう。

「あ、景品もらい忘れた……」

野球しろ——あ、してますね……（後書き）

小杉と仁王のバッティングの成績はパワポケだからできること。

仁王のあんな長い思考しながらだと、バットを振る前にボールはキヤッチャーミットに納まってると思いますw

そこはまあ、仁王の頭の回転が速いってことで納得してくださいw
お願いします><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293z/>

パワプロクンポケット0！

2011年12月14日13時46分発行